

厚生科学研究費補助金（子ども家庭総合研究）

川崎病の治療と長期管理に関する研究

ガンマグロブリン治療不応例に対する再治療法の検討：ガンマグロブリン再投
与法とステロイドパルス療法の比較

主任研究者 加藤裕久 久留米大学医学部主任教授

研究協力者 橋野かの子、石井正浩、菅原洋子、古井 潤、赤木禎治

研究要旨

川崎病のガンマグロブリン治療（IVIG）不応例に対する IVIG 再投与とステロイド治療では冠状動脈病変合併の発生頻度に有意差がないが、ステロイド療法では冠状動脈の一過性拡張が見られる。有熱期間ではステロイド療法が短い、等が明らかになった。

A. 研究目的

川崎病の IVIG 不応例に対し、IVIG 追加とステロイド療法の効果をプロスペクティブに比較検討すること。

B. 研究方法

対象は、1994 年 1 月から 1998 年 12 月までに、川崎病で当科を受診した 262 例。その内 2 回の IVIG に反応しなかった症例を IVIG 追加群と、ステロイド療法追加群の 2 群に分け、以下の方法を用い効果を評価した。

1、血液検査、生化学検査

2、有熱期間

3、断層心エコーでの冠状動脈合併の確認

4、選択的冠状動脈造影

C. 研究結果

全 262 例中、IVIG (2 g/kg) の初期投与に反応したのが 226 例 (86.2%)、残り 36 例に対し IVIG (1g/kg) を追加し 19 例に効果が見られた。2 回のガンマグロブリン投与に反応しなかった 17 例を IVIG 追加群とステロイド投与群にわけそれぞれ治療を行った。

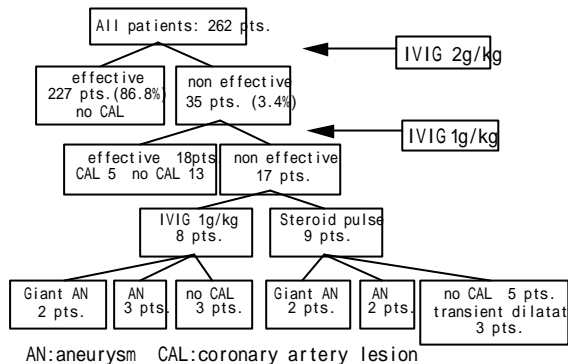
1、血液検査、生化学検査

血算(WBC、RBC、Hb、Ht、Plt)、生化学検査(CRP、ALB)では、有意差はなかった。

2、有熱期間

有熱期間は、IVIG 使用群で 15.4 ± 2.9 日、ステロイド使用群で 11.2 ± 4.3 日と 2 群間で有意差を認めた ($p <$

0.05)。また、IVIg 再投与、ステロイド再投与後の有熱期間においてもIVIg群 4.9±3.4日、ステロイド使用群 1.4±0.7日と2群間で有意差を認めた (p < 0.05)。



D. 考察

2群間に冠状動脈病変の合併率で有意差が無く、有熱期間でステロイド追加群の方が短い事より、ステロイド治療の再検討が必要と思われた。しかし、ステロイド投与群の一部の症例では冠状動脈の一過性拡張があり、ステロイドが奨励されるには、このメカニズムの解明が必要である。

E. 結論

- 1、IVIg 不応例に対して、IVIg 追加とステロイドパルス療法でその効果を比較検討した。
- 2、有熱期間では有意差を認めた。
- 3、冠状動脈瘤合併率に有意差は無かった。
- 4、ステロイドパルス療法は治療期間

の短縮と医療費の削減の点で今後検討を要すると考えられた。

F . 研究発表

1、論文発表

無し

2、学会発表

Re-treatment for Immune Globulin-Resistant Kawasaki Disease:A Comparative Study of Additional Immune Globulin and Steroid Pulse Therapy Hashino K, Ishii M, Himeno W, Sugahara Y, Akagi T, Kato H 49th Annual Scientific Session, American college of Cardiology 2000 March, Anaheim

G . 知的所有権の取得状況

1、特許取得

無し

2、実用新案登録

無し

3、その他

無し